

何度でもやり直せる社会をつくりたい ～若者とホームレスのおっちゃんで街を変える～

ほーむどあ
NPO 法人 Homedoor 理事長
川口 加奈

川口加奈（かわぐち かな）

14 歳でホームレス問題に出会い、ホームレス襲撃事件の根絶をめざし、炊出しや 100 人ワークショップなどの活動を開始。19 歳で Homedoor を設立し、シェアサイクル HUBchari はぶちやり 事業等でホームレスの人や生活保護受給者累計 140 名以上に就労支援、300 名以上に生活支援を提供する。ウーマン・オブ・ザ・イヤー 2013 若手リーダー部門や Google インパクトチャレンジ グランプリにも選出される。大阪市立大学卒業。1991 年大阪府高石市生まれ。



■「Homedoor」とは一立ち上げの経緯

川口 皆さん、こんにちは。NPO 法人 Homedoor の川口と申します。

私は大阪市立大学に通っていたんですが、初めて龍谷大学さんにお邪魔してその奇麗さに驚き、こんなに環境の良い大学のご近所に住みたいと思いました。

先ほど大矢野先生にご紹介頂きましたように私たち Homedoor は、「ホームレス状態を生み出さないニホンに」という目標をいかに実現するかを日々考えて活動しています。具体的な活動は、①ホームレスになる前段階＝入口を封じること、②ホームレス状態から脱出する出口づくり、そして③ホームレスに対する偏見の解決や啓発で、これら 3 つを活動の柱に置いています。

Homedoor は 4 年前、私が 19 歳（大学 2 回生）の時に立ち上げた団体です。まず、なぜこういった団体を立ち上げたかについてお話をさせていただきます。

皆さん、「釜ヶ崎」をご存知ですか。私が

ホームレス問題に関わり始めたのは 14 歳の頃でしたが、私は釜ヶ崎という地名も土地柄も知りませんでした。大阪市内の中学校に通うために釜ヶ崎近くの南海電車や JR 環状線を利用するようになって、駅の高架下に青いビニールシートが連なる異様な光景に驚きました。友達は周囲がホームレスの家に囲まれている中学校を見て「うわっ、すごっ。あの中学校の子らどうやって通ってるんやろ。おもしろいな」などと言っていて、私も同じような感覚をもっていました。

ある日、近所の子が私とは違う行き方で学校に通っていることを知りました。彼女は新今宮駅の一つ手前の天下茶屋駅から地下鉄に乗っていて、「何で遠回りして学校に通うの」と尋ねると「親から、新今宮駅を避けて行きなさいって言われているから」と答えました。周りの子たちに聞いてみると同様の子どもが多く、私は母に「何であの辺を避けなアカンの」と尋ねると「あんたもあまり近寄っちゃ駄目よ」と言われました。私はその周辺がどういった地域か知らないが故に疑問に思い、反抗期を迎えていたこともあって「ちょ

っと行ってみようかな」という気持ちが先攻しました。ネットで「炊き出し」を検索し、「バスケ部の試合に行ってくる」と嘘をついて一人で炊き出しに参加しました。これが、ホームレス問題に関わるそもそものきっかけでした。

誰一人知る人のいない中でおにぎりを握っていると、「お米は新潟から、梅干しは和歌山から。いろんな所からいろんな人の思いが詰まった食べ物だから、その方たちの“思い”も握ってくださいね」と言われましたが、どうすれば思いまで握れるのか分かりませんでした。

そしていざホームレスのおっちゃんたちにおにぎりを配ろうとすると、「孫みたいな年齢のあなたから命の綱であるたった一つのおにぎりをもらうおっちゃんたちの気持ちを考えて渡しなさい」と言われました。正直、ハッとしました。私はただ興味本位で炊き出しに参加し、私がおにぎりを配ることでおっちゃんたちに不愉快な思いをさせるなんて考えてもいなかったのです。

私はすごく後悔し申し訳なさを感じ「どうすればおっちゃんたちに不愉快な思いをさせなくてすむか」を考えた時、自分自身がホームレスの方たちにあまり良い印象をもっていないことに気がきました。「もっと勉強して良い大学に行って良い会社に入っていれば、ホームレスにならなかったんじゃないの」と、私は近くにいたおっちゃんに質問してみました。おっちゃんは「バカ言え、ワシの家には勉強机なんか無かったんや。それでも勉強してたら母親に『お父さんの農作業を手伝いなさい』って怒られるんや」と言いました。私はハッとしました。小学校に入学すれば当然のように勉強机やランドセルを買ってもらい、勉強していなければ「勉強しな

さい」と叱られる。だから自分が頑張りさえすれば良い大学に入れるし良い会社にも入れる。勉強はできて当然の環境で後は自分の頑張り次第だった私に対して、おっちゃんにはそもそも勉強机がなかった、勉強できる環境になかったということを知りました。

■ホームレスと非正規雇用、日雇い労働の関係

私は与えられた環境が当然だと思い、自分の物差しで人を計っていたんです。私はさらに申し訳ない気持ちになり、「おっちゃんたちはホームレスになる前に何をしていたんだろう」と思いました。「生まれながらホームレスの人はいないはず。だったら」とおっちゃんに聞いてみると、ホームレスの半分以上は非正規雇用出身、1/4 は日雇い労働出身だと知りました。14歳の私は「日雇い」という言葉をこの時初めて聞きました。日雇いとは、30日未満の短い労働形態で、朝雇われて夕方に解雇される建築現場での雇用が大半で、釜ヶ崎は日雇い労働者を集めるためにつくられた町だという話も聞きました。

日本の非正規雇用の割合は約30%で日雇いは約1.7%で、非正規雇用や日雇いに就いていた人の方がホームレスになりやすいんです。でも、日本経済は非正規雇用や日雇いといった労働形態がなくては回らない仕組みになっていて、そのための法律もあります。その上でそういった人たちがホームレスになりやすいのであれば個人の責任ではなく、社会の仕組みや構造に問題があると私は感じました。

おっちゃんたちは「日雇いは本当にキツイ現場やで」と言い、一番酷い時は全国で3日に1人の割合で命を落としている時期があったそうです。

こちらの写真は、カメラマンとして有名な樋口健二氏が撮影した原子力発電でメンテナンスをしている日雇い労働者の姿です。福島原発事故の収束作業にも釜ヶ崎からたくさんのおっちゃんたちが向かったのは有名な話ですが、事故が起きる以前も原発にはメンテナンスが必要で、そういった作業は放射能が残る原子炉建屋内で行われます。では、誰がやるのか。正社員はほとんどせず、日雇いが行います。なぜ、正社員はしないのか。皆さんピンとくると思いますが、正社員がこういった作業をして何年後かに癌を発症すると電力会社は多額の賠償責任を負います。でも、日雇いであれば会社に所属しておらず働いた形跡も簡単に消すことができますし、いろんな仕事に就いているので「あの時の作業が原因で癌を発症した」と言い切ることは難しい。だから日雇いは、原発やアスベストの除去作業、ダムの建設といった厳しい労働を担っている。私はこんなにも過酷な現実を初めて知りました。

釜ヶ崎のおっちゃんは「ボルトを1回しめると2万円、2回しめると3万円もらえる。どうや、やってみいひんか。釜ヶ崎におったら声かけられるで」と言っていました。私は身近な所で行われていたことに衝撃を受け、私たちの生活に欠かせない電気の裏側におっちゃんたちの犠牲があったんだと心に止めました。

日雇い労働者の多くがホームレスになり、1年で217人もの人が路上で凍死、餓死されています（2000年、大阪市内）。私は自分が暮らす大阪市の路上で人が亡くなっているなんて信じられませんでした、これが現実です。

ホームレスは怠けているから楽だからホームレスをしていると思っていましたが、こ

の数字を知った時に誰がなりたくてホームレスになったんだろう、誰が好きでホームレス生活を送っているんだろう、そして、そんな単純なことに気づけず偏見をもっていたことに恥ずかしさを覚えました。

こういった話を聞いた後は、私もおっちゃんたちのことを心に止めて一つ一つおにぎりを配りました。炊き出しは1月のとても寒い日で、でもおっちゃんたちはボロボロのTシャツ1枚でガタガタ震えながらおにぎりをもらう手を差し出していました。そんなおっちゃんたちの中に本当に寒そうなおっちゃんがいる、私は咄嗟に自分が着ていたコートを脱いで渡そうとしていました。それまでの私はボランティアにも興味がなく、逆に「詭弁だ」と思っている自己中な中学生だったんですが、その時初めて心から「少しでも役に立ちたい」と思いコートを脱いでいました。そんな自分に驚きながらコートを渡そうとした時、そのおっちゃんのすぐ後ろにも、そのまた後ろにも寒そうにしているおっちゃんがいることに気付きました。結局、今、1枚のコートを渡しても何の役にも立たない。むしろ単なる自己満足に過ぎない。当時の私は「やれば何でもできる」と思っていたんですが、目の前のおっちゃんすら救えない無力な自分に気づき自己嫌悪に苛まれる日々が続きました。おっちゃんたちのために何かできることはないか。会ったことも話したこともないおっちゃんたちを「ホームレス」という言葉で一括りにし、「なまけている、自業自得だ」なんて…。罪悪感に包まれ、自分にできることを探していたある日、こんな新聞記事を見つけました。

写真に「弱者狙い犯行激化」の文字がありますが、私と同世代の中高生が「社会のゴミだ。俺たちは良いことをしているんだ」とホ

ームレスを襲撃している記事でした。2012年11月には、JR大阪駅で富松さんという方が5人の若者に襲撃され脳挫傷で亡くなった事件や、天王寺駅で小林さんという方が「乞食狩りに行こう」と毎晩のように襲撃され格闘技をかけられ続けてすい蔵破裂で亡くなった事件、日本橋の電気屋さん街で寝ていたおっちゃんが灯油をかけられ火を付けられた事件、眼球を刺された事件と、人を人と思わない様々な事件が起きていることを知りました。

少年たちの「社会のゴミだ」「ホームレスは怠けている、社会の役に立たない存在だ」という供述は「ホームレスになったのは自己責任だ」と心のどこかで思っていた少し前の私とあまり変わりません。では、少年たちと私の違いは何なのか。それは知る機会があったかなかったか、です。私はたまたま通学路に釜ヶ崎があって興味を持ち、たまたま炊き出しに参加しただけで、少年たちはそういった機会に巡り合わなかっただけ。その僅かな差で少年とおっちゃんたちの悲しい出会いが生まれてしまった。だったら私には「知ったんりの責任」がある。知って終わりではなく、そういった問題を伝える義務があると思うようになりました。

■二度の挑戦

私は炊き出しに行った経験を作文にまとめ全校集会で発表させてもらえないかと考えました。一言一句言葉を選び、友達に思いが伝わるよう徹夜で作文を書き、先生にお願いに行きました。先生は「普段はおしとやかな川口さんが何で」と驚いてらっしゃいました。人前で話すことなんて絶対にしなくなかったのですが、「同世代が話せば伝わること

がある」と勇気を出しました。これが私の活動の最初の一步でした。

かなり頑張って作文を読み上げたんですが、友達は目の前で寝ていました。全校集会は寝るものといった位置づけで、私もそれまでは寝ていた側なので何も言えないんですが。「私の話どうだった？」と感想を求めても「ホームレスなんて自業自得やん」「もっと頑張ったら良いだけの話や」と言われてしまい、初めての挑戦は無惨にも失敗に終わりました。

私は繊細で心が折れやすいタイプなので「もうやめちゃおうかな」と思いました。「女性は風俗があるからホームレスになりにくい。私はホームレスにはならないだろうし、私に関わらなくても別に良いか」と。でも、「私は何もしなくても路上で凍死や餓死が起こる現実是不変ならないだろう。生まれた時は誰かしらに喜ばれたおっちゃんがホームレスと一括りにされ少年たちに襲撃されて亡くなる現実も変わらないだろう。でも、私が何かをすれば、ちょっとでも何かを変えることはできるんじゃないか。0.0001%の可能性かもしれないけれど、やらないよりもやった方がマシだ」と思えてきました。

私は「話して駄目なら書こう」と、先生に新聞の発行をお願いしました。いかに目を引くかを考えマイキャラクターも登場させ、「ちょっとでも良いから読んでください!」と新聞を発行しました。友達に感想を聞くと、「川口さんて字が汚いね」としか言われなかったんですが、それでも頑張って続けました。

するとある日、私のロッカーに手紙が入っていました。「ラブレター?!」と一瞬喜んだんですが、私の学校は女子校なのでどの道怪しいやん」と恐る恐る封を開くと、新聞を読

んでくださった親御さんからの手紙で、「私も娘に『ホームレスには近づくな』と間違った教育をしていました。良かったら娘を炊き出しに連れて行ってください」と書かれていました。「そうか」と私は半ば強制的に友達を炊き出しに連れて行きました。すると私と同じように心が変わっていく子たちが出てきて、その子たちと一緒に新聞を発行し続けました。他にも7校から約100人の生徒を集め釜ヶ崎で2泊3日のフィールドワークを企画するなど、ホームレス問題に関わる活動を続けました。

高校3年生になり進路を考えた時、改めて自分の活動を振り返りましたが、結局、何も変わっていませんでした。路上で亡くなるおっちゃんに会える確率も、おっちゃんに「昨日も少年らに小便をかけられたわ。何とか路上生活から抜け出したい」と言われて応えられないことも。結局、何もできないという後悔しか残りませんでしたが、私の活動は単にホームレス状態を良くするだけの対症療法にすぎない、だから駄目だったのではと考え直しました。今必要なのはホームレスを生み出す構造を変え、根本的な解決を目指すことだと。

■「Homedoor」設立へ

私は日本で最初にホームレスの数を数え、ホームレス問題を研究されている先生が多い大阪市立大学への進学を決めました。入学式で隣に座った子に「この大学ってホームレス問題に熱いよね」と聞いても何の反応もありませんでしたが、1年ほど訴え続けると「一緒にやろう」と言ってくれる友達もでき、2回生の時に「Homedoor」を設立しました。

その時、起業家の先輩に言われたのは「ニ

ーズの代弁者であれ」でした。自分たちがやりたいことをやるのではなく、おっちゃんのニーズを代弁する立場であり続ける。そうでなければ意味がないと。それまでの5年間、ホームレス問題に関わってきましたが、代弁というほどのことができていた訳ではありませんし、心のどこかに「自分のために…」があった私はハッとしました。

もう一度ゼロからおっちゃんたちについて勉強をしておそうと、Homedoor初のプロジェクトとして釜ヶ崎でモーニング喫茶を開始しました。朝8～10時までモーニングサービスをやって、10時30分から大学へとといった生活を1年間ほど続けました。最初は7時開店だったんですが、朝が弱い私のせいで7時30分になり8時になり、最後は9時開店と、あまりモーニングの機能を果たせなくなっていたんですが、「しょうがないなあ」と言いながら通ってくれるおっちゃんたちの生の声を聞いていきました。

2003年以前は路上から生活保護を申請しても却下されていました。お金がなくて困窮しているから路上生活をしているのに生活保護を受給できないのはすごく変な話で、「それはおかしい」と裁判で争われ勝訴となり、ホームレスの方でも公園を一時住所として生活保護を受給できるようになりました。これ以降、ホームレスから生活保護受給者になった方が非常に増えました。

それでもホームレスを続ける方は「国のお世話になるのは申し訳ないから」「昔、自己破産して借金を帳消しにしてもらった借りがある。さらに迷惑をかけるのは嫌だ」など、50代、60代の方には自分で頑張ろうとする意識が強くあります。また、離ればなれになった家族に「〇〇さんが生活保護を受けていますが、ご家族で扶養できませんか」といっ

た扶養照会が行われ、これが嫌で自分で頑張ろうとする人が多いんです。

また、ホームレス状態から生活保護を受けた人の意見としては「税金で生活をしていて肩身が狭い」が圧倒的です。さらに生活保護を受けるとケースワーカーに「ちゃんとした仕事を探さない」と言われ続けますが、何年も働いていないおっちゃんを雇ってくれる所はなかなかないため、ケースワーカーと現実の板挟みになるおっちゃんが非常に多いんです。さらに「路上にいた時は話し相手がいけれど、生活保護を受けて部屋にいるところりつきりになり、仕事がないと外に出ることもないので孤独だ」とも。

結果、生活保護を受けて何とか生活を立て直そうと頑張った人たちが心を折られ、約3割がホームレス状態に戻ってしまいます。ならば Homedor は、ホームレス状態、生活保護状態をステップにした出口づくりと啓発活動を行ってこうと決めました。

正社員で働いていてもちょっとしたきっかけで非正規雇用になり、さらにちょっとしたきっかけで非正規雇用すら見つからなくなり、貯金を切り崩しながら次の仕事を探すものの見つからず、貯金が底をつきホームレスになると、ホームレスになる時はだんだん階段を下りるようにゆっくりとなります。でも、脱出する時は少しずつおりてきた小さな階段を一気にかけ上がらなければなりません。家を手に入れ、仕事に貯金、そして頼れる仲間も見つけてと、これらを一気に手にするのは一般の方でもなかなかできません。しかも、ホームレスの約6～7割の方は知的障害、発達障害、精神障害など何かしらの障害を抱えています。また、路上で凍死や餓死が迫る中で暮らしているため多くの方が鬱病になってしまいます。そんな中、一般の人でも難しい

階段を一気に駆け上がり普通の生活を手に入れるのは至難の業です。

そこで少しずつ上っていける「階段づくり」を考えました。まずはホームレス状態から生活面、精神面を安定させるために何かしらの家に入って頂きます。生活保護を受けたくない人も多いので、生活保護に代わる「Homedoor 基金」を設置し、生活面、精神面を安定させる家を提供する「ハウジングファースト」の考えから、最初に家を提供します。次に手に職をつけて頂けるよう、中間的就労（就労のリハビリ）を提供します。さらに働きながらであればその人の就労阻害要因（次の仕事に就く阻害になる要因）を見つけやすいので、それをもとにアドバイスし、次の仕事に繋げたいと考えています。

■「HUBchari」のスタート

元ホームレスで生活保護を受けている方は「人と会わない日がある（68%）」「自殺を考えたことがある（34%）」と、まずは社会から必要とされていることを実感して頂くことが重要です。そのために Homedoor を通じて就いて頂く仕事を考えた時、「おっちゃんが得意なことを仕事にできないか」といった思いが出てきました。日本橋で夜な夜なおっちゃんたちに聞いて回ると、「得意なことなんてない。ワシなんかアカン」と最初はネガティブなのですが、根気よく聞いて回ると「自転車修理やったらできんこともないけどな」と言ってくれました。おっちゃんたちは空き缶を集めるためにゴミの中から拾ってきたボロボロの自転車を修理して使うんですが、重い缶をたくさん積んで長距離を走ると、一日に一度はチェーンが外れたりパンクしたりするそうです。おっちゃんたちの一

日の平均収入 1000 円から 500 円もの修理代なんて払ってられませんから、7 割近くのおっちゃんが自転車修理技術を身に付けているので、これを活かした仕事づくりとして「HUBchari（ハブチャリ）」が生まれました。

街中に設けた拠点で自転車を借りて返せるシェアサイクル（レンタサイクルの進化版）は、自転車問題の解決策としてヨーロッパでうまれました。特にパリが有名で、300m おきに貸出・返却の拠点“ポート”を設置、1 日に 10 万人が利用し、今や電車やバスに次ぐ公共交通として使われています。その大成功を受けてニューヨークや台湾、中国など世界各国で取り組みが始まり、横浜では行政が場所を提供し、NTT ドコモさんが年間数億円をかけて運営しています。同様のシステムを私たちも大阪で、しかも元ホームレスで生活保護を受けているおっちゃんたちを主役という「HUBchari プロジェクト」がスタートしました。

HUBchari は大阪の二大問題「ホームレス・生活保護問題」と「自転車問題」の一挙解決をコンセプトにしています。支援される側から問題を解決する担い手に、おっちゃんたちの特技を活かし人一倍やり甲斐を感じてもらえる、それが HUBchari です。

当初、自転車修理が得意なおっちゃんたちとできる事業を考えた時、放置自転車をリサイクルして販売する案も出ましたが、大繁盛して他の自転車屋さんが潰れてホームレスになったら元も子もない、競合が生まれてはいけないということでボツになりました。また、リサイクルした自転車と他の商品との差別化が難しく、「この自転車を買うとホームレス支援に繋がります」と支援をあおいで買って頂かなければなりません。それではおっちゃんたちはいつまでたっても支援される

側のままですし、お客様もホームレス問題に感心のある方に限定されてしまいます。でも HUBchari は、ホームレス問題に興味のない方、ただ使いたいから使う方がほとんどです。HP でも 1 ページ程度にしか「就労支援になっています」とは書いてないですし、そういったことを打ち出さずに利用して頂けることが魅力だと感じています。当時、大阪でシェアサイクルを行っている会社はなく競合も生まれないなど、いろんなパズルのピースがバチッと当てはまり HUBchari を決めることができました。これが大学 2 回生の冬休みのことでした。

まずは HUBchari の拠点探しからスタートしました。ヨーロッパや横浜のように行政にお願いしようと大阪市役所に行ったんですが、タライ回しに遭い失敗。行政が駄目なら企業さんにと、ビルやカフェの軒先にあるデッドスペースを提供して頂く「ノキサキ貢献」という新しい形の CSR としてご協力頂けないかとお願いして回りましたが、市役所と同様にどこの馬の骨とも分からない怪しい団体に大事な土地を貸してくれる訳がありません。

そもそも「ホームドア」とは駅のホームに設置された転落防止柵のことで、おっちゃんたちの人生の最後の転落防止柵になりたい、またハウスだけでなく心のホームも失っているおっちゃんたちがホームに入れる扉の役割を果たしたいと命名したんですが、不動産屋さんばくて余計に話をややこしくしていたようです。

大阪市内中のホテルはほぼ全部回り、最後はラブホテルにまでお願いに行っただんですが、「ここはそんなこと違うで」と追いつられました。約 200 社に飛び込み営業をしましたが、結局、どこも駄目。それでもいろん

な人に相談すると、「ずっとは難しいけれど、イベントとして一週間くらいなら」という話になり、梅田 LOFT さんなど 4 カ所が協力してくださることになりました。

これが 3 回生の夏休みで既に就職活動が始まる時期でしたが、私は「ホームレス問題を何とかしたい」という思いだけで突き進んでいたの、自分の将来については何も考えていませんでした。

飛び込み営業をしていると、最近の会社は受付嬢もいなくて電話が置いてあるだけで企業訪問なんてしたことのない私は電話の使い方すら分からず、一度就職していろんな勉強を重ねてから起業した方がどれだけ楽だろうというシーンが何度もありました。当時は私ともう一人の女性で活動していたんですが、彼女は実験が終われば就職活動をすると決めていました。実験で利益も上がらず、ついに一人になると悩みに悩んでいたが、お客様から「こんな人があったら良いなと思ってたんや」「ヒールで足が痛かったから助かったわ」と、意外と言っては失礼ですがかなり高評価を頂き、「いろいろな人に喜んで頂ける仕事って良いな。これだけニーズがあるなら何とかなるかも」と希望の光が差してきました。

また、実験の時にかなり高齢のおじいさんが近寄って来て「ワシがやろうと思ってたアイデアやのにパクったな」と思わぬ盗作疑惑をかけられたんですが、そんなに良いアイデアなら「やっぱり私が最初にやろう」とどんどん思うようになってきました。何より 200 社、300 社、最後はラブホテルにまで営業に回った武勇伝が自信につながり、「例え大赤字でも一社くらい拾ってくれる会社があるはず。だったら挑戦してみよう」と腹を括りました。

■ HUBchari の本格始動

HUBchari の実験を『ワールドビジネスサテライト (テレビ東京)』や新聞などに取り上げて頂き、それが一つの実績となり「うちのホテルに置いても良いよ」と言ってくださる所がようやく見つかり、私の元で 4 人のおっちゃんたちが働くことになりました。3 回生の夏休みの終わり、私が 20 歳を迎えた頃でしたが、面接に来るおっちゃんたちは最年長で 70 歳くらいと祖父と同年代の方もいて複雑な心境でした。私を新入社員と勘違いし「社長さんは誰や」と聞かれて焦ったこともあり、私みたいな若造に指図されて働きたいんじゃないかなといった心配も実の所ありました。

HUBchari では働きたい人は誰もが働けるようにと可否のためではなく、おっちゃんの初期状態を測るために面接をするんですが、中には一年ぶりに人と話したと 3 時間くらいノンストップで話し続ける人もいれば、「100 社くらい面接に行っただけで、どこも要らなくて言われた。ワシは社会のお荷物なんかな」と泣き出す人もいました。「来週から働いてくださいね」と言っても採用されたことが信じられず、「ワシ、ほんまに働けるんか」と毎日電話してくる人もいました。そんな個性豊かなおっちゃんたちが HUBchari で働いてくれることになりました。

企業さんが協賛で提供してくださった自転車を集め、貸出・返却票を作り、オープン準備を急ピッチで進めました。そしてオープンの日。自転車 10 台を並べ、水色のエプロンと帽子姿のおっちゃんたちが各拠点に立ちました。でも肝心の看板を作り忘れ、通りすがりの人に「この自転車なんぼ」と再三

聞かれる、商売としてはあるまじきオープンとなっていました。するとあるおっちゃんが「全部拾いもんで作ったんや」と看板を作ってくれました。チェーンが取手になり自転車のベルが付いていて、「このベルを鳴らすとワシが奥から出て来る。わしを呼ぶ“呼び鈴”や」と。

沖縄出身のこのおっちゃんは小さい時にご両親を亡くしおばさんに引き取られ、いじめられたり暴力を振るわれたりする中で一生懸命バイトをしてデザインの専門学校に進学したそうです。でも、20歳の時に体調を崩してバイトができなくなり学費も払えなくなってやむなく中退。その後、正社員で働いていた会社が50歳の時に倒産し、頼れる人もなく遠く離れた沖縄に帰ることもできず、釜ヶ崎で日雇いに。ただ、釜ヶ崎では55歳を過ぎるとほとんど雇ってもらえず、ホームレスになり Homedoor にやってきたそうで、専門学校で学んだデザイン技術が35年ぶりに活かせたと喜んでくれました。おっちゃんは新しい拠点ができる度に看板を作ってくれるようになり、2つ目の看板はタイヤの中に木枠をはめ込み、「こっちにもワシを呼び出す呼び鈴は付けといた」と。ちょっとスターバックスをパクった感じもしてヒヤヒヤしているんですが、本当に嬉しく思っています。他にもハンガーの針金で自転車の模型を作ってくれるおっちゃんもいます。一つ一つ芸が細かくなんと反射板まで付いていて、このおっちゃんの手先の器用さは本当にすごいんです。

こちらの写真は積水ハウスさんのご協力で梅田スカイビルに設置した HUBchari の拠点です。梅田スカイビルは『世界を代表する20の建造物』に選ばれていて、サクラダファミリアやタージマハルと並ぶ建築物な

ので、観光客から見ると「サクラダファミリアの前に HUBchari のイメージかな」などと思いながらやっています。ただ、外国人観光客が多く英語ができないおっちゃんたちは非常に困ったりもしています。

またこちらは最初の実験時の写真で、大阪ガスさんイチオシのエネファーム前で HUBchari に協賛してくださっている記事が日本経済新聞に掲載され、すごく喜んでくださり本格的に場所を提供してくださることになりました。このように協力してくださる企業さんも「他のホテルとの差別化になる」「メディアに登場できて嬉しい」と言ってくださり、拠点もどんどん広がっていきました。

おっちゃんたちの働く時間は、最初は週1回2時間と少ない時間で設定します。中には30年以上も働いていない人もいて、いきなりフルタイムでは身体がついていけないので、少ない時間から少しずつ労働時間を増やす半年間の就業支援プログラム（就労リハビリ）を提供し、座学研修や日常支援プログラム、スタッフとの交流イベント等を行う中で次の仕事を見つけて頂いています。基本は6ヶ月ですが、希望されて1年、2年と働いているおっちゃんもいます。

おっちゃんたちにはお給料として多い方で15万円をお渡ししていますが、あるおっちゃんが初めての給料を握りしめていきなり走り去ったことがありました。「どうしたのかな」と心配していると、両手いっぱいカップメンを抱えたおっちゃんが帰って来ました。おっちゃんたちは普段カップメンやお惣菜を食べることが多く、「自分が好きなカップメンを事務局の子たちも喜んでくれるだろう」とたくさん買って来てくれたのです。生活保護を受けていると自分の好きに

は使えませんし「貰っている」という感覚が強く人にプレゼントなんてできない人がほとんどです。でも自分で稼いだお金は好きに使って良いと、初めてのお給料で3ダースものカップメンを買って来てくれたのです。私たちはそれほどカップメンが好きな訳でもないんですが、頑張って食べる毎日が続きました。するとその様子を見ていた他のおっちゃんたちも「この子たちはなんてカップメンが好きなんだ」とさらに大量のカップメンを買ってきてくれてと、こちらがその大量のカップメンの写真です。

さらに私の誕生日には、7人のおっちゃんが別々にバースディケーキを買ってくれて、一人ひとりが必ず言う「こんなんするのんワシだけやろ」の台詞に大笑いしました。

こちらの写真は交流プログラムの様子ですが、「たこ焼パーティ」など毎月何らかのイベントや忘年会などを開催し、普段も和気あいあいとやっています。

昨年の忘年会は南森町と京都に2つの料亭を持っていたおっちゃんがお寿司を握ってくれました。私たちは100均の包丁やプラスチックのまな板で良いと思っていたんですが、おっちゃんはちゃぶ台をひっくり返さんばかりの勢いで「そんなアカン」と寿司桶からこだわりっていました。おっちゃんを持つ料理人の包丁は1本20万円もするらしく、料亭を辞めて5、6年も経つのにピカピカでした。大切に磨き続けていた包丁を使わせてもらい野菜を切っていると、「そんな切り方はアカン」とまた怒られ、といった楽しい交流会をしています。おっちゃんたちからは参加費500円を頂きもちろん予算内を目標にしていますが、料理人のおっちゃんと買い出しに行ったらネタだけで一万円もかかり大赤字を出してしまいました。

こちらの写真の手前のおっちゃんは10年ほど引きこもっていて、この時初めて交流会に参加したんですが、誰よりも楽しそうに喋っていました。おっちゃんみんなが喜び「こんなに楽しいことはない」と言ってくれたので赤字でも良かったなと思っています。

一昨年は大阪市住吉区と、昨年は大阪市北区と、今年は大阪市北区、西成区、平野区の3区と協同で HUBchari や自転車対策の仕事をさせて頂きました。区が管轄している場所を提供して頂き生活保護受給者が働く。自転車問題も生活保護問題も解決する一挙両得策として、現在は20拠点で HUBchari を運営しています。

【VTR 上映】 ではここで、おっちゃんたちが働く様子を映像で見て頂きます。

私はとても口下手でおっちゃんたちの様子を上手くお伝えできないので映像を観て頂きましたが、皆さんとても生き生きと働いています。映像に出ていた S さんや H さんをはじめ続々と次の仕事が決まっていて、これまで HUBchari で働いて頂いた58名の約半分の方が次の仕事を見つけています。HUBchari で働く前と後で劇的に変化している方が多く私たちもやり甲斐を強く感じています。

■生活支援と啓発活動

就労支援に続き生活支援でも様々な取り組みを始めました。

こちらの写真は孤独を抱え引きこもりがちなおっちゃんを集めてパッチワーク教室をやっている様子です。これらの講座は寄付会員さん（毎月1,000円を寄付）の寄付金を

元に、毎週様々な講座を継続的に開催しています。こちらは大学の落研サークルの方に来て頂いた落語会の写真です。おっちゃんたちが普段人前で話すことはもちろんありませんが、落語で人を笑わせる体験講座やカップメンばかり食べているおっちゃんのための調理実習講座など「CHANGE（チェンジ）」という新たなプログラムを昨年度から実施しています。

さらに接客がメインの HUBchari の仕事は苦手という方に黙々と作業する仕事を提供できないかと「HUBgasa（ハブ傘）」プロジェクトをスタートしました。年間1億3,000万本が使い捨てられ深刻な環境問題となっているビニール傘問題の解決策として、皆さんが集めて寄付して下さった傘をおっちゃんがりメイクして卸す仕事もやっています。

また、啓発運動の一つとして夜回り活動「ホームパト」を行っています。寄付金を元に事務局で作ったおにぎりやお弁当に加え冬は毛布やカイロなどの生活用品も配っています。梅田の事務所を拠点につくった3つのコースを午後9～11時30分頃にかけて回ると80人くらいのおっちゃんに、終電後になると120人くらいのおっちゃんに会えます。JR大阪駅で富松さんが襲撃され亡くなられた事件もあったので、少年たちが襲撃を起こさないよう、事件を早期発見できるようパトロールをしています。新たに「撤去問題」が起こっています。「路上で寝て良い」と思っているおっちゃんはいませんが、他に寝る場所がない。行政は撤去しなければいけないのですが、撤去されても家に住める訳ではなく居場所を転々と変えるしかありません。また、こういった撤去は冬に行われることが多く、おっちゃんたちがゴミの中から集めた毛

布や寒さを凌ぐための家財道具すべてを失ってしまうため、凍死の可能性が一番高まります。この状況を何とかするためのシェルターを提供できるよう、今年度から動いています。

他にも釜ヶ崎周辺を歩く「釜歩き」や「釜 Meets（かまミーツ）」を行っています。「釜 Meets」は町歩きに加え炊き出しの参加など6時間の長丁場ですが、2ヶ月に1回の開催です。すでに40～50回を数え、参加者も1,000名を越えています。私の講演会を聞き「釜 Meetsに行きたい」とお母さんに頼んで岸和田から来てくれた小学6年生から60歳を越えた方までと年齢層も広く、青年海外協力隊で南米に行く前日に静岡から来て下さった方や東京から自転車で来ようとして熱海で挫折した学生さん、北海道から来てくれた学生さんなどいろんな人が参加してくださっています。

こちらは新年会でジェンガをしている写真です。Homedoor でゲームと言えばジェンガと決まっていて、日雇いをしていたおっちゃんの手はゴツゴツで積み木よりも大きく、絶対におっちゃんたちが倒すんです。罰ゲームは「恥ずかしい話をする」になっていて、事務局の女の子たちに恥ずかしい話をさせたいおっちゃんたちは一致団結して頑張るんですが、結局おっちゃんたちが倒すと毎回同じオチになっています。

和気あいあいと日々を過ごしていますが、現在 Homedoor では、就労支援事業「HUBchari」「HUBgasa」「中間的就労研究所」、生活支援事業「CHANGE!」「ホームパト」の5事業と啓発活動「釜歩き」「釜 Meets」「講演・ワークショップ」「HC ネット事務局」の4事業の計9事業を行っています。

今後の活動としてはさらに多くの「出口づ

くり」をと考えています。HUBchari や HUBgasa の他に、おっちゃんたちがもつ様々な特技を仕事に繋げたい。HUBchari や『The Big Issue』の販売だけではなく、もっといろんな職種から選択できるよう、様々な職種づくりをと考えています。

また、生活保護を受けずにホームレスから脱出できる「Homedoor 基金」では住居の提供にも取り組んでいきたいと考えています。

■最大の難関「入口封じ」を目指して

まだ着手できていない最大の難関「入口封じ」は、出口づくりが整う 2～3 年後をメドに始めたいと思っています。

ホームレスになる寸前の大半の方が残り僅かなお金をファーストフードやネットカフェで使い路上に出ないように頑張ってもらっていますが、お金が尽きるとホームレスになってしまいます。最後のセーフティネットとして適切なシェルターが受け止め、ホームレスになる前の段階で封じたい。どうなるかわかりませんが、私たちの活動を支えてくださる多くの方々と共にそういった事業に取り組みたいと考えていますので、皆さんも Homedoor のサポーター登録にご協力をお願いします。

私たちが活動をする中で一番しっくりとくる言葉は「明日は我が身」です。おっちゃんの話を開けば聞くほど、私もホームレスになる可能性があると感じます。だからこそ何をして欲しいかを考えながら日々活動しています。皆さんにも「もしホームレスになってしまったら…」「今、何ができるか」を考えて頂き、Homedoor でなくてもボランティアや様々な支援団体があるので興味を持って頂ければと思います。

■揺るぎない指針の元に

「ホームレス状態を生み出さないニホンに」。私がここまでやってこられたのは、「知ったからには知ったなりの責任がある」という言葉があるからです。今日、皆さんもホームレス問題を知った側の人間に回りました。ぜひ、明日から、もちろん今日からでも「知ったなりの責任」を考えてホームレス問題に心を止めて頂ければと思います。

ご清聴、ありがとうございました。

【質疑】

【質問】 2008 年度の修了生です。久々に講演会でお話を聞かせて頂きましたが、すぐに何かをしなければと勇気づけられました。本日のお話にはありませんでしたが、財政面、採算収支、財源などについてお聞かせ頂けますか。

川口 ありがとうございます。2010 年のスタートから財政的にはどんどんと増え、昨年度が 1,766 万円、今年度は既に決定しているもので約 3,000 万円の予定です。収入は HUBchari の利用料（1 時間 100 円、月額 980 円）と企業さんの協賛金（広告費）を中心にした 795 万円に生活支援「CHANGE!」の寄付金や講演会、釜 Meets による 271 万円などを合わせた 1700～1800 万円の他、助成金や補助金でやりくりしています。

支出はおっちゃんたちへの人権費が占めています。Homedoor を卒業した、例えば先ほどの映像に出ていた Y さんはお給料が約 32 万円だそうで、私よりぜんぜん多かったです。そういったショックも抱えつつ就労支援を経たおっちゃんたちが次のステッ

プに進んでくれることを喜んでいます。でも、おっちゃんたちはとても義理堅いので、卒業後は寄付をしてくださった方もいらっしゃると思います。

【質問】 今日は大変良いお話を聞かせて頂きありがとうございました。HUBchari は非常に喜ばれているようですが、町の人たちからはどう見られていますか。京都でもレンタサイクルが流行っていて外国人がよく利用してらっしゃいますが残念ながらマナーが悪い。自転車を取り巻く環境の変化に伴い道路交通法も変わっていますが、それを知らない人が多くその人がたまたま HUBchari に乗っていると「HUBchari に乗っている人はルールを守らない」となり、逆にルールやマナーをきちんと守っていれば良いイメージ

につながります。啓発活動の一環になるのか分かりませんが、HUBchari を安全に利用して頂くためにリーフレット等を作られてはいかがですか。

川口 ありがとうございます。お配りしているマップにマナー等は載せていますが、10月に発行予定の『HUBchari マガジン』でマナーについて大々的に掲載する予定です。HUBchari 以外にも行政からの委託で自転車対策のお仕事をさせて頂き約20名が働いているので、自転車対策も絡めながら町の自転車対策協議会の皆さんと一緒にやっていきたいと思っています。貴重なアドバイスをありがとうございました。

（2014年6月28日）

